学習院大学

「クレオール」のフランス文学

【文学部　フランス語圏文化学科　教授　鈴木雅生】

研究者紹介

1971年生まれ。東京大学文学部卒、同大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。
パリ・ソルボンヌ大学にて博士号取得。

【キーワード：フランス文学、ル・クレジオ、カミュ、デュラス、植民地】

本研究の目的・内容

本研究では、これまで共通の枠組みのなかで問題にされることの少なかった、語本来の意味での「クレオール」（＝植民地生まれの白人）の作家に焦点を合わせる。具体的には、フランス系アルジェリア人の子として生まれたカミュ、植民地に派遣されたフランス人教師を両親として仏領インドシナに生まれたデュラス、そして18世紀末にモーリシャス島へ移住し20世紀初頭までそこに根を下ろしていた家族に生まれたル・クレジオである。これらの作家は、いずれも自らの生まれ育った土地においては余所者の白人でしかなく、かといってフランス本国に帰属意識を持つこともできず、二重の外在性のなかに生きることを余儀なくされ、「支配者」とも「被支配者」とも異なる視点から植民地を見ているだろう。

彼らの文学における植民地の表象が、エグゾティスム文学に見られる「支配する側によって外側から描かれた植民地」や、フランス語圏文学に見られる「支配される側によって内側から描かれた植民地」とどのように異なり、どのように重なるのかを考察することによって、植民地帝国主義の膨張から脱植民地化にいたる18世紀から現代までのフランス文学に新たな視座を引き入れることが本研究の目的である。

本研究の新規性・優位性、成果の応用・活用

ともすると「支配者／被支配者」という安易な善悪二元論的な図式に還元して論じがちな、いわゆるポストコロニアル批評が興隆を見せている現在において、カミュ、デュラス、ル・クレジオというこれまで個別に論じられていた作家たちを「クレオール作家」という共通の枠組みのなかで捉え直し、支配者の視点でも被支配者の視点でもないこの第三の視点を導入する本研究は、フランス文学史に新たな見通しを提示することができるだろう。

主な研究業績

【著書】・*J.-M.G. Le Clézio : évolution spirituelle et littéraire. Par-delà l'Occident moderne*, L'Harmattan, 2007.
・『フランス文化事典』（共編著）、丸善出版社、2012年
【訳書】・ル・クレジオ『地上の見知らぬ少年』、河出書房新社、2010年
・ベルナルダン・ド・サン＝ピエール『ポールとヴィルジニー』、光文社古典新訳文庫、2014年
【受賞】・第16回日仏翻訳文学賞（2011年）

応対できる研究・企業等への希望

1. 共同研究　2. 受託研究/評価試験　3.学術指導/コンサルティング　4.講演/出張講義
5.寄付金受入　6. 報道等の取材/出演　7. その他（　フランス文学翻訳　）

研究者より：

【お問い合わせ】
学習院大学　研究支援センター　〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL：03-5992-1228　Mail：Ken9-off@gakushuin.ac.jp
URL：http://www.gakushuin.ac.jp/univ/research/index.html

学習院大学 広報大使
さくまサン

©'12,'18 GAKUSHUIN